

就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究 (1) - 3

- 社会的場面における自己制御機能の発達 -

鶴川女子短期大学	佐藤淑子
白百合女子大学	目良秋子
白百合女子大学	田矢幸江
白百合女子大学	柏木恵子

A Longitudinal Study on the Social and Cognitive Development of Japanese Pre-school Children (1)-3

- Development of Self-Regulation in Interpersonal Conflicts -

Tsurukawa Women's Junior College	SATO, Yoshiko
Shirayuri College	MERA, Akiko
Shirayuri College	TAYA, Yukie
Shirayuri College	KASHIWAGI, Keiko

就学前児の社会的場面における自己制御機能の発達の縦断的研究の3回目の報告である。今回は1997年から実験を行ってきた都内の幼稚園の2つのクラスの年少から年長までのそれぞれ3年間ずつの縦断的データが揃ったので、その後の分析結果について報告する。

絵画自己制御能力テスト(2つの葛藤場面を組合せたテストを2種類)を実施する際に、最初に各場面で自己を主張するか抑制するのかをたずね、併せてなぜそうするのかその理由もたずねてきた。そこで提示された理由を細かくコード化し、さらにそれらの理由を自己依拠的理由と他者依拠的理由のカテゴリーに大きく分けて再コードした。

クラスター分析の結果、年長時に自己依拠的理由と他者依拠的理由の提示のパターンが分化している可能性が示唆された。また、他者依拠的理由の提示の多い子どもは自己制御機能の発達が著しいことも見いだされた。

【キーワード】 就学前児, 自己制御(自己主張, 自己抑制), 対人葛藤場面

This is the third report of studies on the development of self-regulation of Japanese pre-school children in interpersonal conflicts. For each experiment of Picture Self-Regulation Test (PSRT), subjects were asked to present reasons why they assert themselves or inhibit themselves under such circumstances. The reasons children presented were coded into sub-classification such as "friend-ship", "avoidance", "rules", "authority", "self-image" etc. Then we recoded these categories into two large categories: "self-oriented" and "other-oriented" reasons.

According to cluster analysis of the patterns of "self-oriented" and "other-oriented" reasons children presented, when they reach the eldest class of pre-school, children seem to develop more specific pattern in explaining why he/she would behave in a self-assertive or self-inhibitory way.

The results suggested that pre-school children who tend to present "other-oriented" reasons seem to have developed higher level of self-regulation.

【Key Words】Pre-school, Children, Self-regulation (Self-assertion, Self-inhibition), Interpersonal, Conflicts

目 的

就学前児の社会的場面における自己制御機能の発達について、これまでいくつかの報告をしてきた（佐藤ほか，1998，1999；佐藤，2000，2001）。今回は，1997年から実験を行ってきた都内の幼稚園の2つのクラスの年少から年長までのそれぞれ3年間ずつの縦断的データ（S組：男児10人，女児10人・1997年～1999年，N組：男児7人，女児14人・1998年～2000年）が揃ったので，その後の分析結果について報告したい。

方 法

実験方法については以前にも報告しているが，ここで簡単に述べると，絵画自己制御機能テスト（田島ほか，1988）の自己主張と自己抑制各1場面ずつのテストの組合せ2種類をそれぞれ年に1回ずつ，計，年に2回のペースで3年間2つのクラスで実施してきた。「花いちもんめ」（自己主張）と「ブランコ」（自己抑制）の組合せを実験1，「砂場」（自己主張）と「花びん」（自己抑制）の組合せを実験2とした。各場面の内容については田島ほか（1988）を参照されたいが，以下に簡略に説明する。

花いちもんめ：すでに何人かの子どもたちが遊びをはじめてしまっている場面で，「入れて」と主

張できるかどうか

砂場：使っていたシャベルを無理に取り上げられてしまう場面で、「いやだ」「やめて」と主張できるかどうか

ブランコ：自分が順番待ちに割り込むことを抑制できるかどうか

花びん：せっかく作った粘土の花びんを友だちに不注意でこわされた場面で、自分の感情を抑制できるかどうか

就学前児に絵画自己制御機能テストを実施する際には、最初に各場面で自己を主張するか抑制するのかをたずね、併せてなぜそうするのか理由もたずねてきた。年少では自分の主張・抑制の判断の理由を言語化することが難しいこともたびたび見られたが、年中、年長と年令が上昇するにつれてきちんと自分の行動の理由を言葉で説明できるようになっていく。今回は、この理由の提示についてより詳しくいくつかの視点から分析、考察したものを報告する。

結果と考察

1. 理由の分類

図 1 に子どもの理由の下位分類を示した。全体では、友達関係、自己感情、代替、自己性格・役割、権威に言及したものが占める割合が多い。次に主張場面と抑制場面に分けて理由の分布を見た(図 2)。主張場面では抑制場面より自発性と状況判断に言及したものが多く、逆に自己感情と代替は抑制場面の方が主張場面よりその占める割合が多い。また、自己と他者の一对一の関わりの場面である対一場面と、自己と集団の関わりの場面である集団場面に分けて、理由の分布を見たものが図 3 である。集団場面では対一場面に比べて友達関係に言及したものが非常に多く、対一場面では集団場面に比べて自己感情と代替に言及したものが多い。

そして、この理由の下位分類を複数の評定者で協議し、自己に注目し依拠する自己依拠的理由と他者に注目し依拠する他者依拠的理由とに大きく分類した(表 1 参照)。理由の自己依拠的・他者依拠的分类について、2人の評定者が独立にコードし、その一致度は 84%であった。

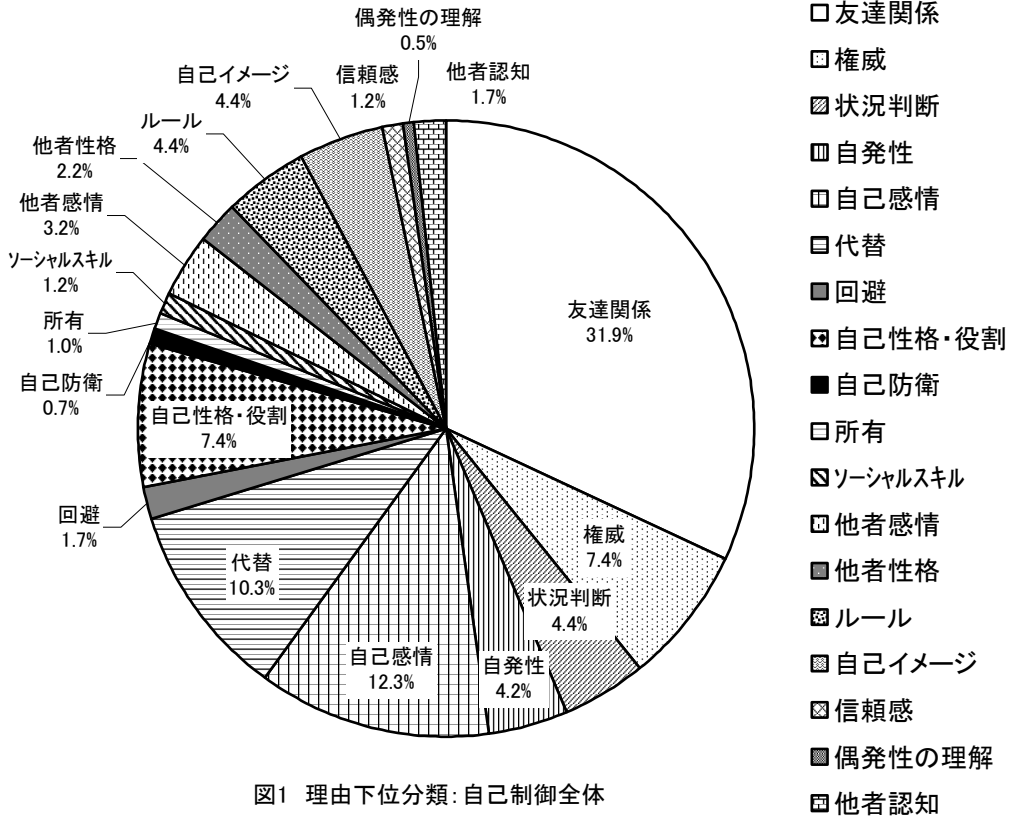


図1 理由下位分類: 自己制御全体

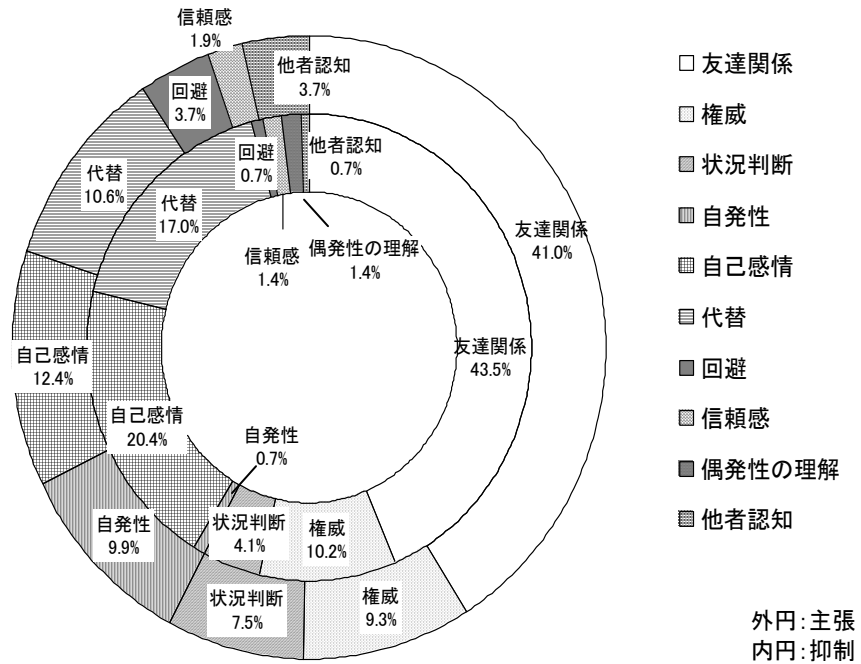


図2 理由下位分類: 主張場面と抑制場面

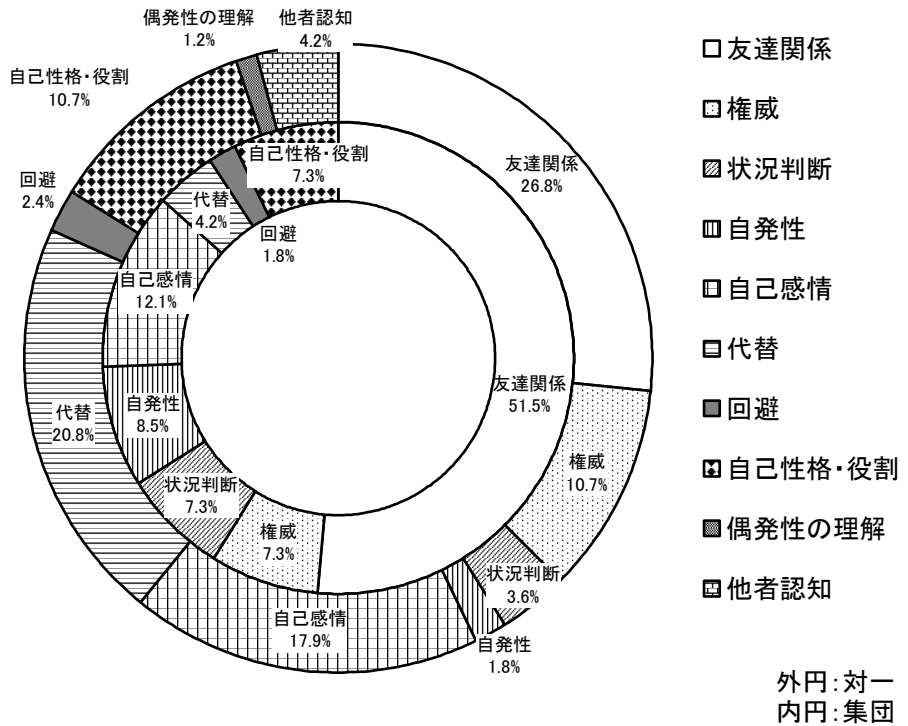


図 3 理由下位分類: 集団場面と対一場面

表1 自己依拠的理由と他者依拠的理由の分類

	内容	プロトコール例
自己	自発性	・入れてって言ったから ・壊さないでって言えばいい
	自己感情	・(自分が)遊びたいから ・入れてくれなかったらぶんぶん怒る
	代替	・ダメだったら他の遊びをする ・また作ればいい
	回避	・けんかはしない。けんかしてもしょうがないから
	自己性格・役割	・(自分が)優しいから ・ぼくは泣き虫じゃないから
	自己防衛	・そのままにしておく方がぶたれたりしないから
	所有	・だってさあ、こっちのもんだからさあ ・自分の花瓶だから
	ソーシャルスキル	・「やめてよ」じゃなくて「返してください」って言ったら返してくれる
	自己イメージ	・だって私おりこうだもん ・だって妹いるもん。割り込みしたらぼくの妹も真似するよ
他者	友だち関係	・みんなと仲間になると入れてくれる ・みんなが私のこと大好きだから
	権威	・お母さんが言ってたから ・先生に言ってもらう
	状況判断	・だってね、あと1人いないとダメじゃん ・こっち足りないから入れてくれる
	他者感情	・みんながずるしたらやな気持ちになるから ・(相手の子は)ちょっと悪かったなという気持ち
	他者性格	・他の友達が優しいから ・だってこの子(取った子)意地悪そうな顔してないんだもん
	ルール	・1234で順番に並んでると次にできるから ・この人花瓶壊しちゃいけないから
	信頼感	・やめてって言われたとき、やめてって言うのをわかってくれるから
	偶発性の理解	・よそ見して壊したらいいと思う ・それだけだったらわざとじゃないから
	他者認知	・返してくれるときと返してくれないときがある子もいるから ・返してくれるよ。返してくれないときもある

2. クラスタ分析

就学前児の自己制御の発達についてさらにその構造を深く考察するため、今回はクラスタ分析を行なった。類似性の指標としてはユークリッド距離を用い、クラスタ化の方法としては最遠隣法を用いた。

(1) 子どもの理由の提示のパターンによるクラスタ分析

絵画自己制御テストの場面内容は、自己主張を測る「砂場」(下位次元：拒否・強い自己主張)と「花いちもんめ」(下位次元：遊びへの参加)の二場面、自己抑制を測る「花びん」(下位次元：フラストレーション耐性)と「ブランコ」(下位次元：遅延可能)の二場面である。そのうち、「砂場」と「花びん」は自己と他者の一対一の関わりの場面であり(対一場面)、「花いちもんめ」と「ブランコ」は自分と集団との関わりの場面である(集団場面)。また、括弧内に示した下位次元のカテゴリーは柏木(1988)の自己主張と自己抑制の因子分析による分類である。

図4に自己依拠的あるいは他者依拠的理由の提示のパターンを手がかりに、年少から年長までのデンドログラムを示した。年少、年中では、理由の提示のパターンはいきあたりぱったりで未分化である。が、年長になると、場面にかかわらず、自己依拠的理由を提示する傾向のある第1クラスターと、他者依拠的理由を提示する傾向のある第2クラスターとに分化する。就学前児の自己制御機能の発達については、年中までは一貫性が見えないが、年長では分化することが示唆された。

(2) 被験児の類似性によるクラスタ分析

被験児の類似性によるクラスタの年少から年長までのデンドログラムを図5に示した。年少と年中では二つのクラスターに、年長では三つのクラスターに分類された。また、絵画自己制御能力テストの実験場面ごとにクラスター間のカイ二乗検定の結果を表2に示した。子どもの自己依拠的理由あるいは他者依拠的理由の提示の頻度にクラスター間で有意差がみられたものを考察する(表2参照)。

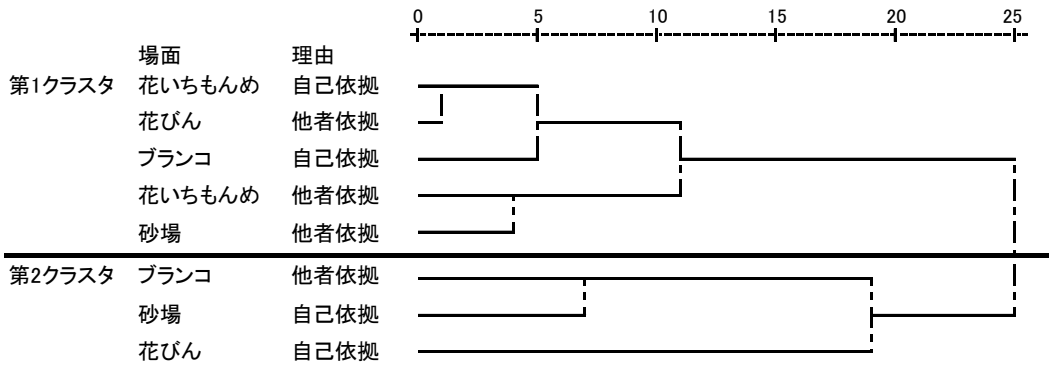


図4-1 理由提示場面のパターンによるデンドログラム 年少

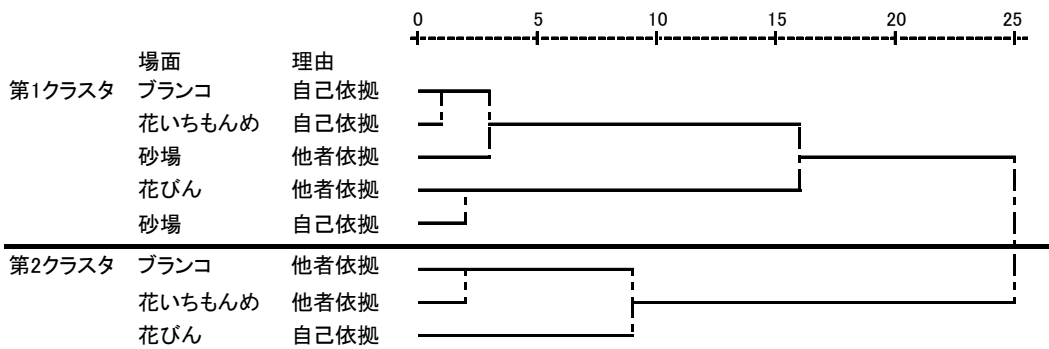


図4-2 理由提示場面のパターンによるデンドログラム 年中

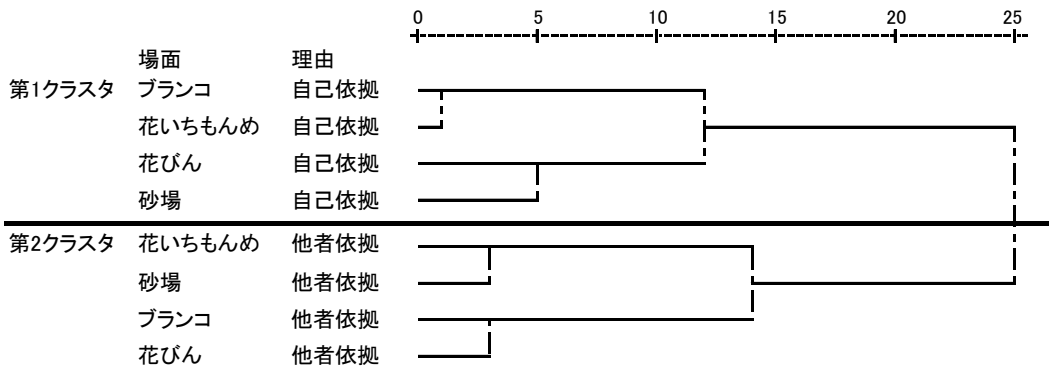


図4-3 理由提示場面のパターンによるデンドログラム 年長

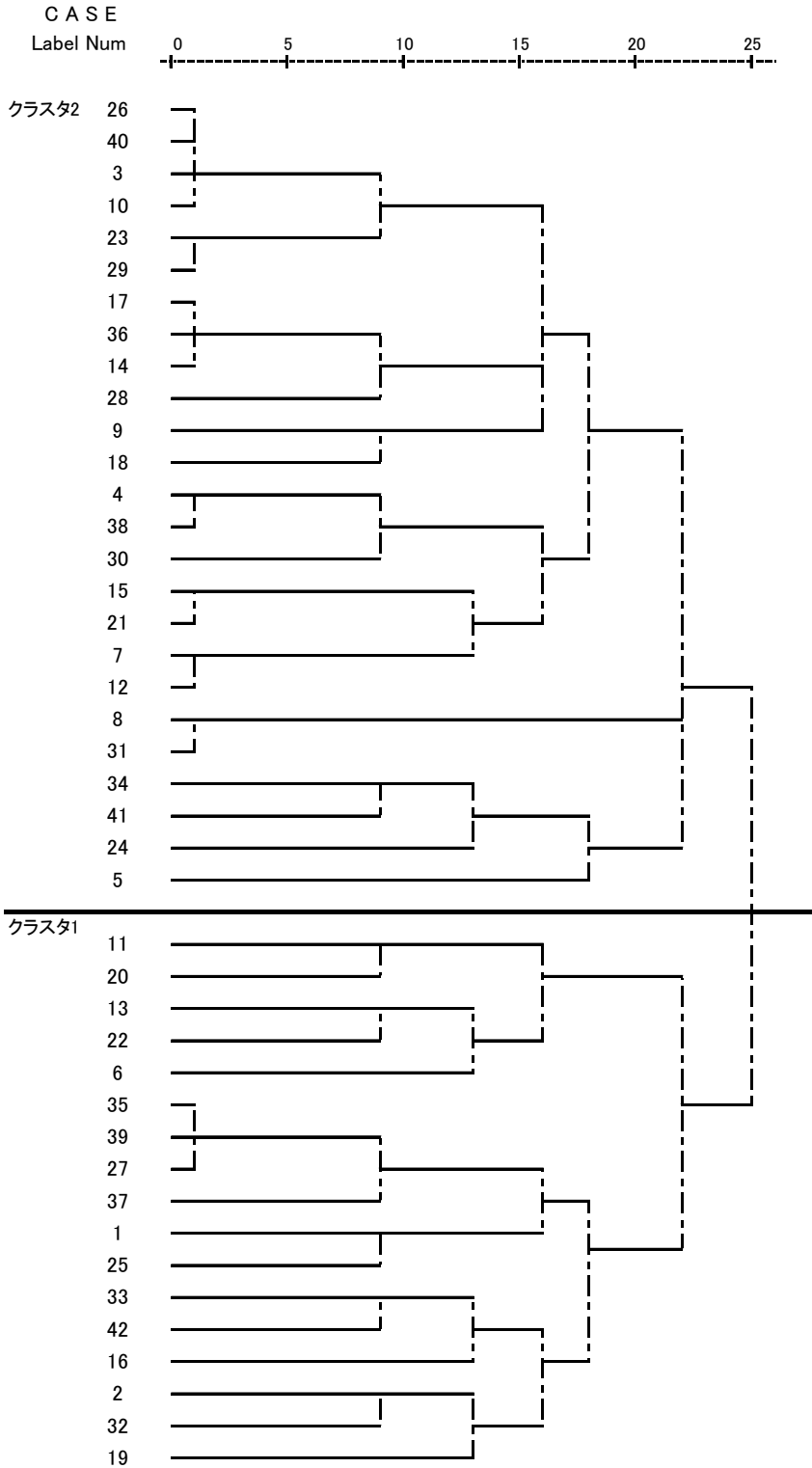


図5-1 被験児の類似性によるデンドログラム 年少

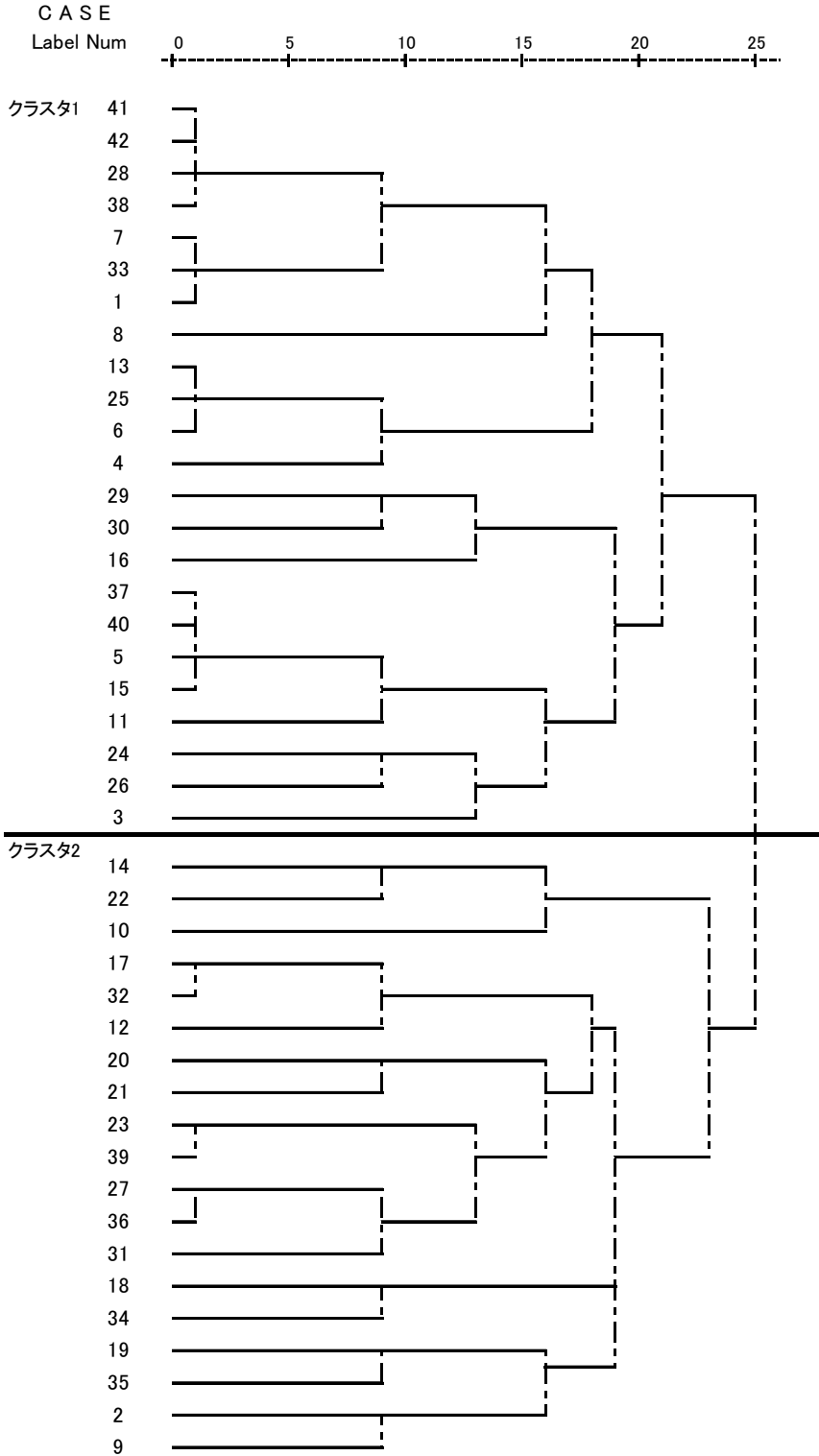


図5-2 被験児の類似性によるデンドログラム 年中

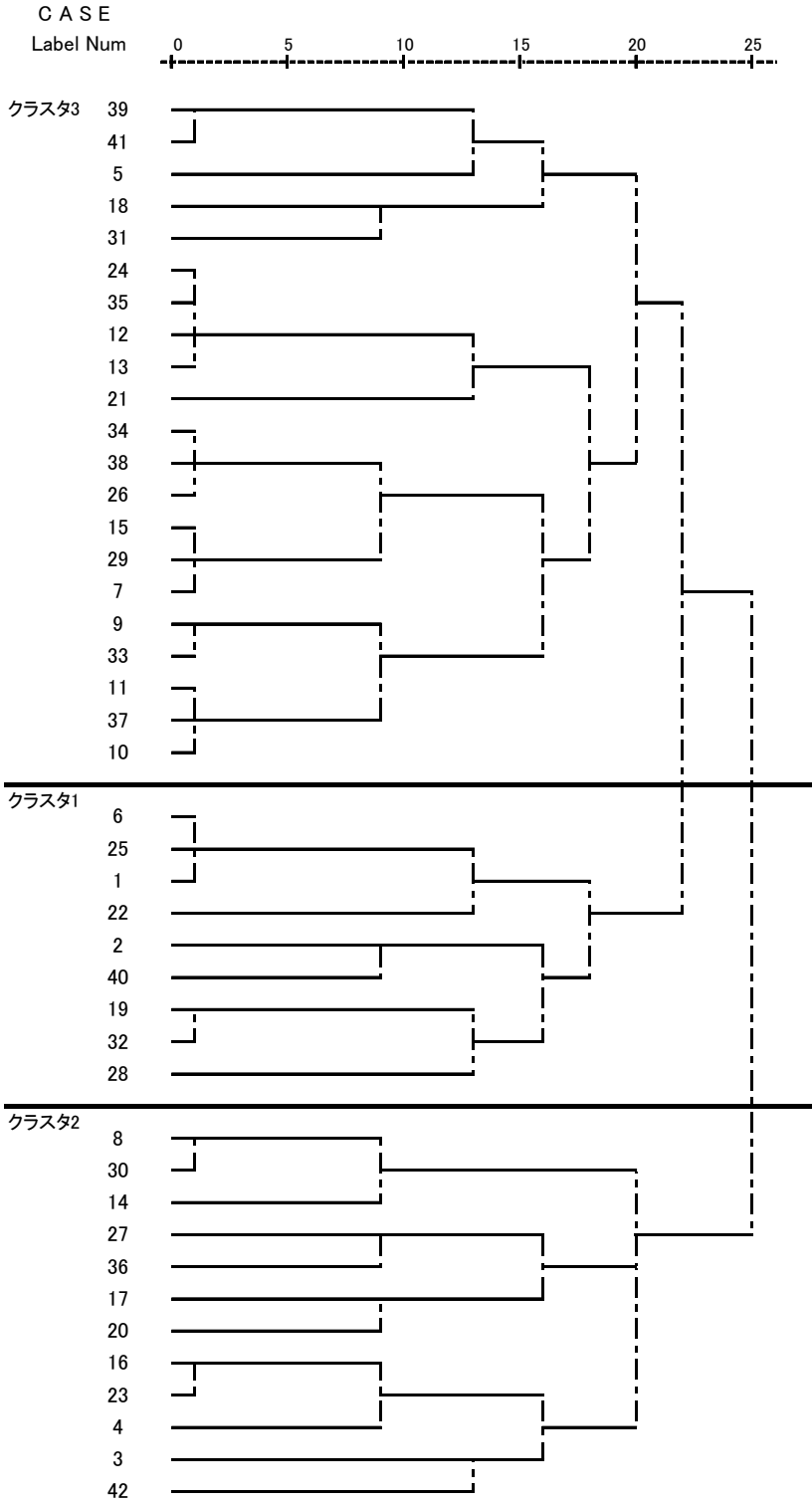


図5-3 被験児の類似性によるデンドログラム 年長

表2 クラスタ間の場面ごとのカイ2乗検定結果

(人数)

理由	場面		ブランコ		花いちもんめ		花びん		砂場								
	自己依拠	他者依拠	自己依拠	他者依拠	自己依拠	他者依拠	自己依拠	他者依拠	自己依拠	他者依拠							
			あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし					
年少	クラスタ1	9	8	2	15	2	15	7	10	15	2	0	17	8	9	5	12
	クラスタ2	2	23	9	16	6	19	2	23	9	16	7	18	3	22	9	16
年中	クラスタ1	4	19	18	5	0	23	23	0	10	13	7	16	8	15	6	17
	クラスタ2	4	15	9	10	9	10	0	19	3	16	8	11	3	16	9	10
年長	クラスタ1	0	9	9	0	3	6	4	5	3	6	4	5	8	1	0	9
	クラスタ2	10	2	0	12	4	8	4	8	7	5	0	12	5	7	4	8
	クラスタ3	0	21	16	5	4	17	10	11	7	14	10	11	0	21	19	2

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

年少をみると、クラスタ1はクラスタ2に比べて「ブランコ」、「花びん」、「砂場」の各場面で自己依拠的理由の提示が多い。但し、「花いちもんめ」ではクラスタ1はクラスタ2に比べて他者依拠的理由の提示が多い。クラスタ2は「花びん」の場面で他者依拠的理由の提示が多い。どちらかといえば、クラスタ1は自己依拠的理由を提示する傾向にあるといえるだろう。

年中をみると、有意差がみられたのは「花いちもんめ」の場面だけである。ここではクラスタ1は他者依拠的理由の提示が多く自己依拠的理由の提示は0である。逆に、クラスタ2は自己依拠的理由の提示が多く、他者依拠的理由の提示は0である。

年長をみると、クラスタ1は「ブランコ」では他者依拠的理由の提示が多く、逆に「砂場」の場面では自己依拠的理由の提示が多い。クラスタ2は「ブランコ」では自己依拠的理由の提示が多く、「花びん」の場面では他者依拠的理由の提示が0である。クラスタ3は「ブランコ」と「砂場」の各場面で他者依拠的理由の提示が多い。よって、クラスタ1は自己依拠的理由と他者依拠的理由の提示の混合型、クラスタ2は自己依拠的理由の提示が多く、クラスタ3は他者依拠的理由の提示が多い傾向にあるといえるのではないだろうか。以上のように、被験児の類似性によるクラスタ分析でも、年長で分化している様相がうかがえる。

2つのクラスタ分析の結果から、幼児期の自己制御機能の発達の構造については、自己依拠的理由と他者依拠的理由の提示のパターンから、年長になって分化する可能性が示唆された。

さて、ここで被験児の類似性によるクラスタと被験児の入園時の初期適応との関わりを見る。本研究は都内の幼稚園で行なわれたが、その園では、担任二人の教師が入園時に子どもたちの初期適応を評定している(表3参照)。その評定に基づいて、被験児を 適応群、中位群、不適応群

に分類した。カイ二乗検定の結果、年少、年中のクラスターと初期適応の間に有意な偏りは見られなかった。しかしながら年長では、他者依拠的理由を提示する傾向のあるクラスター3に5%水準で適応群が有意に多い傾向が認められた(表4参照)。

3. 教師評定と自己制御の型

3年間の絵画自己制御機能テストの結果から、自己主張と自己抑制各6場面ずつのデータが得られている。その自己主張と自己抑制の正反応の平均値を算出し、その平均値より上であるか下であるかの分類から、自己主張と自己抑制の両方が高い 両高型、自己主張は低いが自己抑制は高い 抑制型、自己主張は高いが自己抑制は低い 主張型、両方の側面が低い 両低型の4タイプに分けた。この4タイプの分布において性差が見られ、両高型は女児が、両低型は男児がそれぞれ有意に($p < .01$)多い。

この4つのタイプと自己依拠的理由、他者依拠的理由の提示との関わりについては、他者依拠的理由を提示する傾向は両高群の方が両低群より有意に高い(他者依拠的理由の出現率 両高型 .4659, 両低型 .2342, $p < .01$)ことを以前に報告した(佐藤, 2000)。

また、本研究では就学前児を対象とした絵画自己制御機能テストの他に、一年に4回ずつ、実験を行なった園の複数の教師による園児の自己主張5項目、自己抑制6項目、協調性5項目の計16項目の質問項目についての評定を得ている(質問項目は表5を参照)。この教師評定を上述の自己制御の4つのタイプ別にプロットしたものが図6である。

表3 初期適応項目一覧

1. 喜んで来ない
2. 登園時に泣いて嫌がる
3. めそめそ泣きつづける
4. 親から離れられない
5. 我慢できず自分勝手な行動をする
6. 乱暴する
7. 担任から離れられない
8. 先生になじまない
9. 友達と遊べない
10. 食事が食べられない
11. 話をしない
12. 着席できない

表4 初期適応とクラスターとの関わり (人数)

		適応	中間	不適応
年少	クラスター1	7	7	3
	クラスター2	8	6	11
年中	クラスター1	6	9	8
	クラスター2	9	4	6
年長	クラスター1	5	1	3
	クラスター2	2	2	8
	クラスター3	8	10	3

* $p < .05$

図6に示したように、協調性の発達を最も高く示すのは両高型である。両低型は協調性の発達が最も低い。自己主張の発達、自己抑制の発達については時期によってばらつきが見られるが、やはり両低型の発達は教師評定でも総じて低い。

この分析結果からは、教師の目から見た協調性の高い園児は、絵画自己制御機能テストにおいて自己主張と自己抑制の発達がともに高い子どもたちであるといえるだろう。一般的に協調性という言葉のイメージが与える自己抑制の側面のみが強く自己主張はしない子どもたちでは決してない。

表5 教師評定による園児の自己制御機能の質問項目（*印は逆転項目）

【主張】

- 1 競争心からではなく自分のやりたいことをやり通そうとしてがんばる
- 2 遊び方に自分のアイデアをもっている
- 3 新しい遊びや難しそうな課題に興味を持つ
- 4 他の子どもと意見が違う時に自分の意見を主張できない*
- 5 いやなことはいやとはっきりいえない*

【抑制】

- 1 悲しいことやつらいことくやしいことなど感情をすぐ爆発させ、抑えられない*
- 2 自分の思い通りにならない事があると不機嫌になったり、泣いたり、友達をたたいたりする*
- 3 友達のけんかが起きるとその原因のいかんにかかわらず自分の仲よしのほうに味方する*
- 4 劇やごっこ遊びの役決めの時、自分の思い通りにならないと我慢ができない*
- 5 集団で何かする時に自分勝手におしゃべりしていることが多い*
- 6 自分が遊んでいたものを友達が貸してほしいと言った時、気持ちよく貸してあげられる

【協調性】

- 1 当番など自分に与えられた役割をきちんとこなすことができない*
- 2 争い事が起きたとき相手の言い分や周囲の友人の説得にも耳を傾けることができる
- 3 あまり気の合わない子どもであっても、相手が困っているときには差別せずに助ける
- 4 友達のけんかを両方の言い分を聞いたり止めたりするなどして仲裁することができる
- 5 遊びの中で自分の順番を待てる

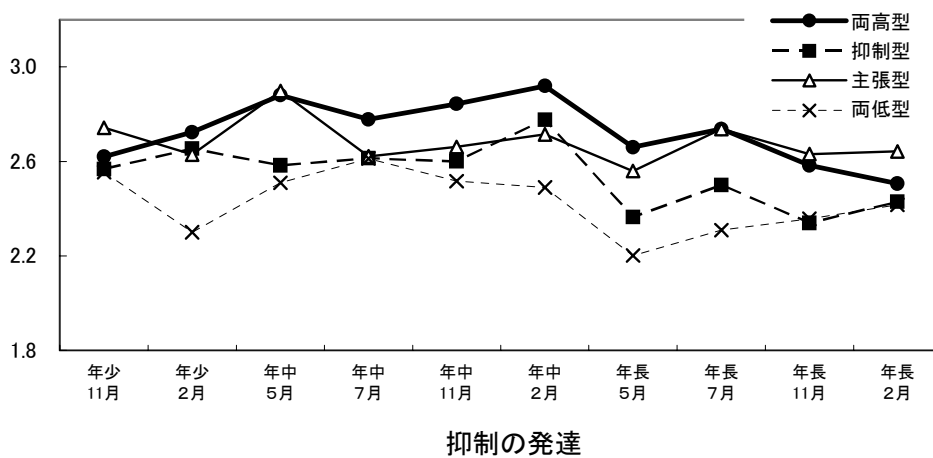
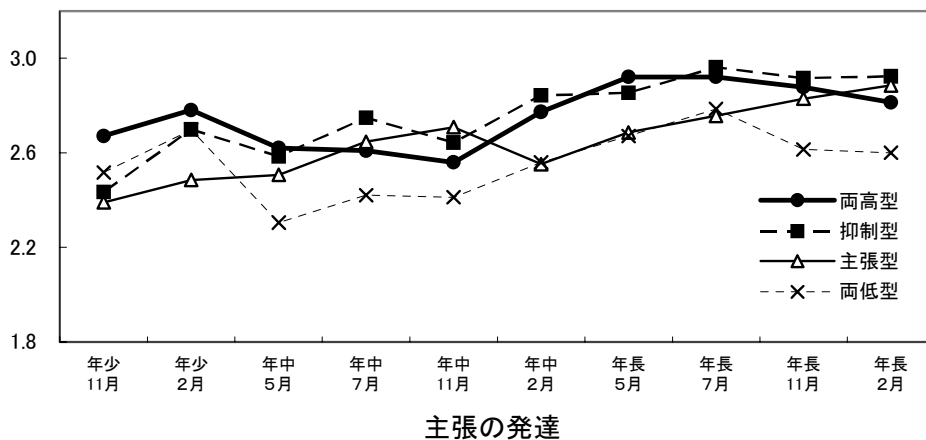
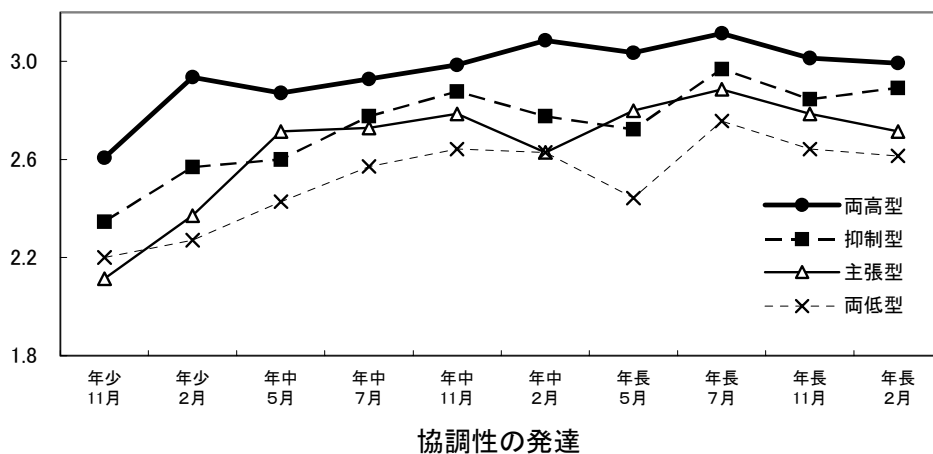


図6 教師評定と4つの自己制御タイプの関わり

さきに 両高型 の被験児が 両低型 の被験児に比べて他者依拠的理由を多く提示する傾向にあったこと、入園時の初期適応で 適応 していると評定された群に年長で他者依拠的理由を多く提示する傾向のあるクラスター3が多かったことを考えあわせると、これまでの本研究の報告と同様に、他者依拠的理由の提示と自己制御機能の発達には関わりがあるといえるのではないだろうか。

この年少、年中、年長のクラスターで絵画自己制御能力テストや教師評定の得点に違いが見られるかどうかを検定した。有意差は見られなかったが、年少ではクラスター1がクラスター2より絵画自己制御機能テストの 自己抑制 の平均値がやや高く(クラスター1=1.529, クラスター2=1.360)、教師評定による 協調性 (クラスター1=2.582, クラスター2=2.448)、自己主張 の平均値(クラスター1=2.706, クラスター2=2.540)も高い。年中では、クラスター1がクラスター2より絵画自己制御機能テストの 自己抑制 の平均値がやや高く(クラスター1=1.783, クラスター2=1.526)教師評定では 協調性 (クラスター1=2.889, クラスター2=2.666)、自己主張 (クラスター1=2.694, クラスター2=2.516)、自己抑制 (クラスター1=2.842, クラスター2=2.574)のいずれもその平均値がやや高い。しかしながら、年長では絵画自己制御機能テストの 自己主張 (クラスター1=1.222, クラスター2=1.250, クラスター3=1.429)および自己抑制(クラスター1=1.667, クラスター2=1.750, クラスター3=1.810)の平均値はいずれもクラスター3が他の2つのクラスターに比べてやや高い。同様に、教師評定の 協調性 (クラスター1=2.859, クラスター2=2.717, クラスター3=2.957)、自己抑制 (クラスター1=2.414, クラスター2=2.434, クラスター3=2.583)の評定でもクラスター3がやや高い。

年少、年中ではクラスター1がやや優勢であるが、自己制御の理由の提示のパターンが分化する年長では、他者依拠的理由を提示する傾向が高いクラスター3が優勢である。したがって、この分析結果からも他者依拠的理由を提示する幼児の自己制御機能の発達が高いことが示唆された。

4. 自己制御機能の発達と他者依拠的理由の提示

幼児期の自己制御機能と社会性の発達との関わりについては、本研究の他にも報告がされている。伊藤(1999)は5才児を対象に向社会的行動と自己主張、自己抑制のバランスによる4タイプとの関わりを研究し、自己主張も自己抑制も高い 両高型 のタイプの子どもは自発的な向社会的行動を多く行なっていることを見いだしている。

また、他者認知と社会性の発達の間に関わりについては、中田(2000)が児童期の子どもへの対人関係能力の研究から、自己表現と他者の情動解読スキルとの顕著な関係を論じている。嘉数(1987)は幼児期には他者概念の方が自己概念よりも先行して発達すると論じている。

また前田(1995)は子どもが幼児期から仲間の攻撃性の高さや社会的コンピテンスの高さを認知し

ており、他者認知は幼児期から児童期にかけてより分化していく（例えば攻撃性や社会的コンピテンスの高いこと以外にも引っ込み思案な子どもを認知する）と報告している。幼児期の他者認知については、さらに、松永（1995）が年少児でも他者間の相互交渉の観察から他者の内的特性を把握していること、そして幼児期でも他者の内的特性に基づいた行動予測を行なっている可能性が推測されると述べている。松永はこの研究以前に幼児期の他者の内的特性に基づいた感情推測の研究を行なっているが、感情推測については5歳頃から6歳頃（年中児から年長児）にかけて著しい変化が見られたのに対し、行動予測については4歳頃から5歳頃（年少児から年中児）にかけて大きな変化があると報告している。

本研究のクラスター分析の結果からは、提示される理由のパターンを手がかりにした分析からは年長で自己依拠的理由と他者依拠的理由の提示がより確立されていく傾向が、被験児の類似性の分析からは年長で自己依拠型、他者依拠型、混合型といったタイプ別の自己制御の発達が分化していく様相が示唆された。前出の松永（1995）によれば、他者の内的特性を把握し、それに基づいて他者の行動を予測する能力は従来、児童期であると考えられてきているが、それは研究方法が子どもの言語能力によって結果が大きく左右されるからであるとして、松永は幼児を対象とした実験で言語能力に頼らない測定方法を用いている。本研究は図版テストを用い、理由の提示を幼児が言葉で表現したものを評定したデータによる。それは以前の調査研究から（佐藤，1993，1994）、幼児が他児との葛藤場面で自己主張するか自己抑制するかの判断にその理由を認識しており、また言葉でその理由を提示できる可能性が高いという感触を得られたからである。たしかに年少では質問の意図が理解できなかったり、なぜそうするかはわからないと答える幼児も多かったが、年中、年長ではほとんどが自分の判断理由を言葉で表現できることが明らかになった。その表現力には個人差が見られるが、実験者が慎重に幼児とやりとりし、ときには質問を重ねたり尋ね方を工夫することによって、子どものいわんとする意味をとらえることができたと考えている。

本研究の結果からも、幼児期に他者の内的特性や行動パターンを捉えている様相がうかがえ、他者依拠的理由の提示と自己制御機能の発達との関係が示唆された。

ところで、日本の社会が子どもの発達において幼児期から自己主張より自己抑制の方を重んじてきたことは、本研究の基礎研究である柏木（1988）の報告でも明らかにされている。伝統的に、自己主張は自己本位、利己主義などと同義にとらえられ、人のために自分は我慢して譲る、やりたいことがあっても周囲の人に合わせることのできる人格特性の発達が尊重されてきた。

これまでの本研究のデータ分析（佐藤ほか，1998，1999；佐藤，2000，2001）は、他者依拠的理由の提示と自己主張と自己抑制のバランスのとれた発達との関わりを示唆するものが多かった。他者

依拠的理由には表1に示したように仲間意識や友達に対する信頼感、他者の気持ちや性格を推測する能力、その場の状況判断などが含まれている。子どもの社会性を育むにはこのような能力が不可欠であることは確かであると思われる。

けれども、自己依拠的理由に含まれる自発性、「ぼくはやさしいから」、「泣き虫じゃないから」と自己の性格や役割に言及すること、トラブル場面で自分の正当な権利を主張する毅然とした態度、などはやはり自己制御機能の発達に重要な要素を多く含んでいるのである。

他者依拠的理由の提示が自己主張と抑制のバランスのとれた自己形成と関わりがあるとして、そのこと自体、人と人とのつきあいが固定的で長期にわたり、個人が他者に与えたマイナスのイメージがそのひと個人の対人関係全体に大きな影響を及ぼす日本的な文化環境の下での自己形成(佐藤,2001)である可能性も否定できない。

今後、個人データの分析をすることによって幼児期の自己制御の縦断的発達をより詳細に考察したいと考えている。

引用文献

- 嘉数朝子.(1987). 児童の対人葛藤解決能力と仲間と自己についての概念. 琉球大学教育学部紀要, 31, pp.391-397.
- 柏木恵子.(1988). 幼児期における子どもの「自己」の発達. 東京:東京大学出版会.
- 佐藤淑子・目良秋子・柏木恵子.(1998). 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1):社会的場面における自己制御機能の発達. 発達研究, 13, pp.52-62.
- 佐藤淑子・目良秋子・田矢幸江・柏木恵子.(1999). 就学前児の社会的認知的発達に関する縦断的研究(1):社会的場面における自己制御機能の発達. 発達研究, 14, pp.27-36.
- 佐藤淑子.(1991, 1993, 1994). 英国在住の日本人就学全幼児の異文化学習:社会的場面における自己制御機能の発達. 発達研究, 7, pp.145-165, 9, pp.41-60, 10, pp.17-29.
- 佐藤淑子.(2000). 幼児期の対人行動における自己主張のメカニズム. 鶴川女子短期大学研究紀要, 第22号, pp.53-58.
- 佐藤淑子.(2001). イギリスのいい子 日本のいい子. 東京:中公新書. 中央公論新社.
- 田島信元・柏木恵子・氏家達夫.(1988). 幼児の自己制御機能の発達:絵画自己制御能力テストにおける4-6歳の縦断的变化について. 発達研究, 4, pp.45-63.
- 前田健一.(1995). 児童期の仲間関係と孤独感:攻撃性,引込み思案および社会的コンピタンスに関

する仲間知覚と自己知覚. 教育心理学研究, 43, pp.156-166.

松永あけみ. (1995). 幼児における他者の内的特性の把握と行動予測能力. 教育心理学研究, 43, pp.204-212.

< 謝 辞 >

本論文のデータ分析で白百合女子大学の加藤千恵子さんにご協力いただきましたことを深く感謝致します。

